

十二山ノ神の信仰と祖霊観(下)

プロジェクト2 研究員
東洋大学ライフデザイン学部 教授
菊地 章太

はじめに

本研究は山古志における十二山ノ神の信仰を考察の対象としており、これまでに旧村内にある十二神社をたずねて現状を記述し、さらに山ノ神にまつわる伝承およびその祭祀について聞き取り調査と文献資料をもとに報告を行なった。これによって山古志の人々が山ノ神をどのように祀り、何を祈願したのかを明らかにしようと試みたのである。

本年度は山古志の周辺地域における十二山ノ神の信仰に目を向けてみたい。ここから信仰圏の広がりを理解するとともに、どのような人々がその信仰を当地にもたらし、それがどのような道筋を経て伝わってきたのかを考えたいと思う。

1. 十二神社の点在する地域

鈴木牧之の『北越雪譜』に言う。「凡そ日本国中に於て第一雪の深き国は越後なりと古昔も今も人のいふ事なり。しかれども越後に於て最も雪の深きこと一丈二丈におよぶは我が住む魚沼郡なり。次に古志郡、次に頸城郡なり」と⁽¹⁾。

豪雪地域の筆頭に魚沼と古志と頸城の三郡があげられている。ここはまた十二神社のすこぶる多い地域としても知られる。十二神社または十二山神社、十二社など類似の名称をもつ神社は全国に六百あまりあるう

ちに、新潟県だけで全体の七割近くを占めている⁽²⁾。わけでも魚沼郡、古志郡、頸城郡、すなわち現在の長岡市山古志地区から魚沼市、南魚沼市、十日町市、上越市松之山地区にかけては、十二神社または十二山神社がおびただしく点在する⁽³⁾。平地にもいくつかあるが、圧倒的に中山間部に多い。

前回の調査で訪れた旧山古志村内の十二神社はいずれも小高い山のとば口から中ほどにあった。今回の調査で訪れた山古志の周辺地域においても同様のことが確認できた。長岡市成願寺町の十二神社は、市街から森立峠へ向かう山道の途中に位置しており、ほど近くに八方台の山並みが望まれる。魚沼市水沢の十二神社は、山古志東竹沢から旧中山隧道をくだった先の台地にあり、泉沢新田の十二神社は背後に上原高原をひかえている。同じく魚沼市広神の十二神社は上権現堂山の麓にあり、また南魚沼市堂島新田の十二大明神や荒山の十二神社はいずれも八海山の登山口に位置する。

同じくこの地方には「十二」の文字が冠せられた地名が少なくない。十二峠、十二越、十二沢、十二原、十二林、十二屋敷など実にさまざまである。たいていは十二神社が奉祀されており、またはかつて奉祀されていた場所とされる⁽⁴⁾。山古志のごく近辺にも十二平の地名がある。小千谷市に編入されたのち、現在は廃村になったが、小さな社殿が残っている。扁額に「奉納十二神」と記されているところから、十二神社であることが知られよう⁽⁵⁾。

十二神社の社名は存続しないものの、他の神社に合

併した例もまま見られる。たとえば山古志村地区虫亀にかつてあった十二神社は、神明社や権現社とともに諏訪神社に合祀された⁽⁶⁾。あるいは、十二神社の名はもたないが山ノ神の祭礼である十二講を伝える神社もある。長岡市蓬平町の蔵王神社では、毎年二月十二日に十二講が行なわれている⁽⁷⁾。

このように山ノ神を祀る十二神社やそれにちなんだ地名が魚沼古志頸城の三郡にことのほか多い。これはなぜなのか。

ここでふたたび十二山ノ神にかかわる伝承に注意してみたい。これまでの調査でたどったとおり、豪雪や地滑りなど自然災害の多い土地だけに、祭礼のときの唱えごとに厄除けの呪言がめだっていた。また、十二山ノ神をめぐる山古志の伝承から溯源して、この地域に祖霊の集まる山中他界の観念があったと類推できる。いずれもそこに宗教職能者の関与していた可能性

が考えられるのではないか。

十二山ノ神を神仏習合による神格と見なすことは従来も指摘されていた。薬師如来の眷属である十二神将与結びつけたり、熊野十二所権現との関連を主張する説がある⁽⁸⁾。このような山ノ神の属性から考えて、その伝播に修験者がかかわっていたと推測されている⁽⁹⁾。

以上をかえりみれば、山古志における十二山ノ神の信仰や祭祀に、なんらかのかたちで修験が介在していることは考えるべきであろう。この地域であれば八海山修験とのかかわりが想定できはしないか。

2. 八海山にかかわる伝承

八海山は山古志からおよそ80km東南にそびえている。旧村内で標高がもっとも高い萱峠からは中ノ岳と



十二神社（長岡市成願寺町）



十二神社（魚沼市水沢）



十二神社（魚沼市広神）



十二神社（魚沼市泉沢新田）

駒ヶ岳をあわせた越後三山が見渡せるというのが、峠の道は中越地震から閉鎖されたままであり、今回の調査でも訪れることができなかった。ただ、これまでも山古志のいくつかの場所から、四季を通じてその山容を望むことができた。それは標高の高い場所には限らない。晴れてさえいれば山と山のあいだに見えるところもある。生活のなかにつねに変わることなく八海山の姿があるという事実は、山古志の人々にこの霊山の存在を身近なものとしているのではないと思う。

山古志に伝わる口碑には八海山にかかわるものがある。たとえば、ことわざに「八海山の夕立は古志の日照りがつづく」とある⁽¹⁰⁾。あるいは「八海山の初雪が笠雪になる年は大雪、蓑雪の年は小雪」とある⁽¹¹⁾。「笠雪」は山頂が白くなってあたかも笠をかぶったさま、「蓑雪」は山裾まで雪に覆われて蓑を着たさまをいうのであろう。

春になって山肌から雪が消えていくとき、さまざまな形を描きだす。これを雪形と呼び、その形の変化が代掻きや田植えなどの目安として農事暦に利用されてきた。豪雪と米どころで知られる越後は、雪形にまつわる伝承の宝庫と言ってよい。魚沼郡では八海山に馬鍬の形が現れると代掻きの目安になり、田植え爺の形になると田植えをはじめるという⁽¹²⁾。これを種蒔き入道と形容する土地もある。山古志では八海山の雪形が馬鍬を引いているとき代掻きをはじめ、馬が立った形に変わると田植えをはじめるといわれる⁽¹³⁾。馬はやがて兎に変わり、鎌の形になったとき畦撫でを終える。田仕事は畑仕事に代わるころ雪もすっかり消えてしまう。

山古志地区種芋原には雪形の言い伝えがある。それは天明の頃だという。日照りが続いたため八海山に雨乞いして、五月の節句には豆蒔きしないと村人が誓いあった。はたして雨が降りだした。ところが誓いを破っ



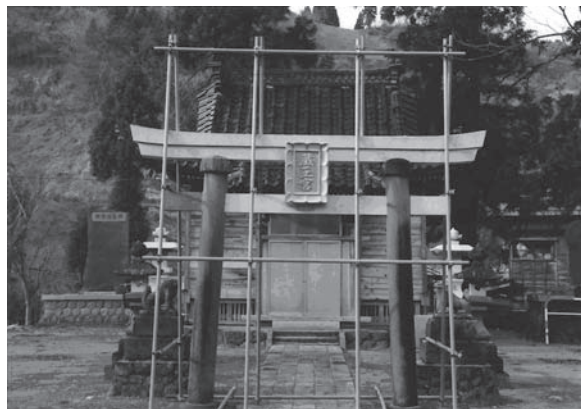
十二神社（南魚沼市荒山）



十二大明神（南魚沼市堂島新田）



諏訪神社（山古志地区虫亀）



蔵王神社（長岡市蓬平町）

て豆撒きをした爺がいた。八海山の神さまが怒ってその爺を山に吹きつけた。それが代掻き馬と豆蒔き爺の雪形となって今も残っているという⁽¹⁴⁾。

雨乞い唄に「トーメトーメ呼ばいや、雨の降らないこともない。トーメトーメ呼ばいや、八海鉢巻米山頭巾で降ってきた」とある⁽¹⁵⁾。「トーメ」は遠雨の意か。山の向こうから雨を呼び寄せようと囃したてるのであろう。「八海鉢巻」は八海山に雲がたなびくさまに違いない。ことわざにも「八海頭巾は晴れたことはない」とある。一方で「八海鉢巻は降ったことはない」という反例も伝えられている⁽¹⁶⁾。

同じく雨乞い唄に「トーメトーメ呼ばいや、あの向こう見やれさ、黒雲ひきいて押し出した。八海山の龍神と七つ釜の龍神と、雨を降らす相談だ」とある。雨乞いに龍神が登場するところは、山伏などの修験者が言い出したのかもしれない⁽¹⁷⁾。ことわざにも「三岳駆ける」とあって、山古志では健脚のたとえとして使われている⁽¹⁸⁾。越後三山を一日で踏破することからくるという。これも山伏ならではの発想と言えようか。

3. 八海山修験の足跡

日本列島の各地に点在する霊山には、かつてさかんに修験者が往来していた。中越においても中世から近世にかけて天台系本山派と真言系当山派の修験が定着したとされる。その後、修験者による八海登山が活況を呈するようになるのは、寛政六年（1794）に当地に至った木食行者の本明院普寛と、その高弟で地元大崎出身の円成院泰賢の功績によっている。普寛は木曾御嶽の王滝口登山道を開いたのち、関東に御嶽講を組織して御嶽信仰を広めたことで知られる。八海山では屏風道を開き、屏風本社を創立。般若十六善神の筆頭である提頭頼神王を勧請してこれを祭祀した。

普寛は御嶽を中興開山するに先立って、上州奥多野の三笠山を開いて山頂に刀利天王を勧請し、ついで武州落合の意和羅山を開いて不動尊を勧請している。八

海山を開いてのちは、これら山岳諸神を御嶽に勧請した。ここに御嶽山座王大権現と八海山提頭頼神王、さらに三笠山刀利天王もしくは意和羅三社権現を合わせた御嶽三社が成立する。普寛によって組織された登山衆講は、御嶽八海山講中として八海山に登山修行する人々の母体となったのである⁽¹⁹⁾。

山古志地区小松倉の小川博二氏宅では庭に石碑が立っており、表面に「御嶽大神」「八海山大神」「三笠山大神」の文字が刻まれている。尊父昭氏の代に宅地の南に祀ってあったのを移し、内鎮守にしたという⁽²⁰⁾。御嶽三社の講中が山古志にもあったことを窺わせるものといえよう。中興開山の時代からつねに御嶽と結びついているが、八海山の周辺では御嶽講とはいっても、実質は八海山の登拝を主体とする八海講であったと考えられている⁽²¹⁾。

同じく小松倉には大日堂があって、金剛界大日如来の坐像を本尊とする。いったい大日如来は現世利益に直結する神仏ではなく、庶民の信仰にはややそぐわない。この像を山古志にもたらしたのは、やはり宗教実践にたずさわる職能者であったと考えてよからう⁽²²⁾。

内鎮守の建立や移動にあたって修験者や祈祷師に依頼することは、村内でもしばしば行なわれている。山古志地区下村の青木健一氏宅では、十二山ノ神と稲荷と諏訪明神を持山の山頂に祀っている。もとは叢林にあったが、土地を手放したあと次の持ち主が開墾した。下肥がかかるのを避けるため、青木氏が八海山の行者にたのんで見晴らしのよい持山の山頂に移したという。小松倉の小川金作氏宅では、稲荷を建立するとき吉祥院の法印に依頼している。山中の星野ナミ氏宅では、正月十八日に浦柄の法印を召して内鎮守の祈禱をしてもらうという⁽²³⁾。

4. 山古志の信仰文化圏

十二山ノ神の信仰が伝播するうえで修験者の関与があったならば、どのような道筋を経て当地に伝わった

と考えるのが妥当だろうか。

山古志を取りまく山並みの南側には、小千谷市内の八海山（上述の八海山とは別の山）から薬師山、雨乞山を経て山古志地区東竹沢の西にそびえる大日山への道筋、同じく八海山から若宮山を経て山古志虫亀の西にそびえる金倉山への道筋が想定される。さらに北側には、尾根伝いに萱峠から鋸山を経て八方台への道も考えられている⁽²⁴⁾。八方台の名は大日如来を中心とした中台八葉院にちなむものか。いずれも尾根づたいにたどる修験者の行道であった。この道に沿って、行者たちは同舎を建立して護摩壇を築いたのであろう。山古志地区種芋原の熊野神社や上述の小松倉大日堂はその痕跡に違いない。

ここで村内に伝わる弥三郎婆の口碑に注目したい。子どもをさらって食べる老婆で、鬼が化けたのだという。この妖怪談は旧山古志村のほぼ全域で聞くことが

できる。弥三郎婆が現れるのは冬の風が強く吹く日であり、広神村の権現堂からやって来るという⁽²⁵⁾。

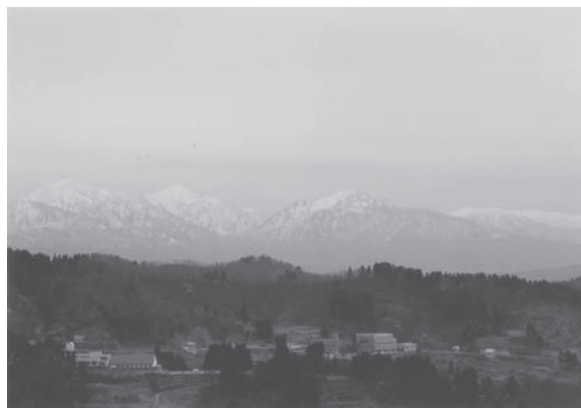
柏崎や弥彦にも同様の話が伝えられており、弥彦山から来るという口碑もある。あるいはこちらが原型かもしれないが、山古志の伝承では隣村の広神村（現在は魚沼市に合併）からとする例がはるかに多い。子どもを叱るときなど、「権現堂の弥三郎婆さが来るぞ」と脅かすそうである。

魚沼郡六日町（現在南魚沼市）にも弥三郎婆にちなむ口碑がある。やはり子どもを叱るときや風の強い日などに、「弥三郎婆さ出るぞ」と語られた⁽²⁶⁾。

山古志には猫又の妖怪談も伝わっている。葬式のとき現れて、棺桶をあけて死体を持ち去って食べてしまうという。大道峠の猫又とか権現堂の猫又とか呼ばれており、村内もしくは近隣の具体的な地名がそこに付せられている⁽²⁷⁾。



八海山（山古志地区竹沢から）



八海山（山古志地区金倉山から）



八海山石碑（山古志地区小松倉）



大日堂（山古志地区小松倉）

このように山古志における弥三郎婆や猫又の口碑がいずれも広神村権現堂に結びついているという事実は、魚沼郡から古志郡へとつながる伝承文化圏の存在を考えさせるであろう。

江戸時代には山古志から濁沢を経て長岡城下へ往来する道や浦柄を経て小千谷へ往来する道があり、それ以外に茂沢あるいは小平尾を経て広神村へ、さらに魚沼へと往来する道があった⁽²⁸⁾。昭和24年（1949）に中山隧道が開通し、現在は新中山トンネルが通じているが、かつては山古志の東側を尾根づたいにたどっていた。そこが古志郡と魚沼郡の境を越えて生活物資を運ぶ道筋となっていたのである。

おわりに

3年間の継続研究として旧山古志村の十二山ノ神の信仰について考察したが、なお未解決の問題が多く残された。次年度以降もさらに研究を継続させたいと考えている。そこで明らかにすべき今後の課題を列挙しておきたい。

上述したとおり八海山修験は御嶽修験とつながっていた。山国である信州にはまた山ノ神信仰の事例がきわめて多い。山古志のそれとのあいだにはどのような共通性や異質性が認められるであろうか。もしも共通するところがあるとすれば、歴史的な接点や連続性が把握できるだろうか。さらにそのことを踏まえたうえで、祖霊観の形成過程をどのように捉えられるか。そこには民俗学の視点からだけでなく、比較宗教史の視点からも注目すべき点が少なくない。

祖霊観の問題を考えると、山古志の周辺に目を転じてみれば、八海山の山麓から登山道に無数に見られる霊神碑の存在が注意される。銘記による限りはおおむね個人の供養碑であり、木曾の御嶽にも同様のものが残っている。故人の家族や講中が建てたものだが、存命中に建てる逆修の碑もあるという⁽²⁹⁾。死者の霊魂が山にとどまるとする山中他界観、あるいはそれを

供養することによって神霊に昇華するという霊魂浄化の思想にもとづくものではないか。これはつとに柳田國男が主張したところである⁽³⁰⁾。

本研究は、山古志における山ノ神信仰の過去と現在をたずねることにより、たえまなく続いてきたその信仰を成り立たせるところの祖霊観のありようを探っていく試みであるが、目標である祖霊観については十分な考察ができなかった。それは次年度以降の課題としたい。山古志の人々の心を山につなぎとめているものも、おそらく先祖のいます山々への思いとつながっているのではないかと予想される。

【略記】

『通史』 山古志村史編集委員会編『山古志村史通史』山古志村役場、1985年

『民俗』 山古志村史編集委員会編『山古志村史民俗』山古志村役場、1983年

【注】

- (1) 鈴木牧之撰、岡田武松校訂『北越雪譜』岩波文庫、1978年改版、p.172.
- (2) 中村幸一「十二神社について」『上越市史研究』2号、1997年、p.2.
- (3) 一例として、1917年に刊行された『中魚沼郡誌』によれば、郡内の神社総数327社のうち十二神社は139社あるという（大護八郎『山の神の像と祭り』国書刊行会、1984年、p.28）。また、塩沢町（現在は南魚沼市に合併）で行なわれた調査によれば、神社神名帳などに記載されている町内の十二神社は18社あるが、市町村合併前には25社が確認されている。合祀されているものなどを含めれば、さらにその数は増大するという（塩沢町編『塩沢町史通史編』上、塩沢町発行、2002年、p.502）。
- (4) 渡辺行一「十二のつく地名について」『高志路』196号、1962年、p.13.
- (5) 山崎進「長岡の山の神と山の神祭り」『長岡市立科学博物館研究報告』33号、1998年、p.71.

- (6) 拙稿「十二山ノ神の信仰と祖霊観（中）」『福祉社会開発研究』2号、2009年、p.172.
- (7) 山崎進、前掲論文、p.57.
- (8) 新潟県編『新潟県史資料編』22巻民俗編Ⅰ、1982年、p.831; 中村幸一、前掲論文、p.8.
- 井上鋭夫によれば、信越国境の山間部を中心にして善性派と称される本願寺派門徒がおり、阿弥陀如来から発せられる十二光仏を信仰していたという（『山の民・川の民』平凡社、1981年、p.120）。十二山ノ神が祀られている地域との関連からも注目すべき見解であろう。
- (9) 横山旭三郎「新潟県の十二山の神」『日本民俗学』171号、1987年、p.150; 大護八郎、前掲書、p.24.
- (10) 『通史』p.952; 『民俗』p.422.
- (11) 『通史』p.949; 『民俗』p.420.
- (12) 斎藤義信「新潟県の雪形」駒形題先生退職記念論文集『新潟県の歴史と民俗』堺屋図書、1988年、p.286、292.
- (13) 『民俗』p.403、423.
- (14) 『通史』p.774.
- (15) 『通史』p.804.
- (16) 『通史』p.828; 『民俗』p.162.
- (17) 『通史』p.805.
- (18) 『通史』p.832.
- (19) 鈴木昭英『越後・佐渡の山岳修験』修験道歴史民俗論集第3巻、法蔵館、2004年、p.36.
- (20) 『民俗』p.371.
- (21) 鈴木昭英、前掲書、p.64.
- (22) 『通史』p.70.
- (23) 『民俗』p.373.
- (24) 『通史』p.69.
- (25) 『民俗』pp.453-456.

1983年に発行された『山古志村史民俗編』には、雪山の麓に屋敷森のような木々が見える写真が掲載され、「広神村の権現堂」と記されている（p.455）。しかし旧広神村、現在の魚沼市広神には権現堂の名のついた山はあるが、同名の堂宇は地図にない。前々回と今回の調査のうちに現地の方々に訪ねてみたが、心あたりのある方にはお会いできなかった。山古志村史の編

集委員長を務めておられた酒井省吾氏（1980年から2000年まで山古志村長）にこの点についてお尋ねしたところ、昔は子どもを叱るときなど「権現堂から弥三郎婆がさらいに来る」と言って脅かしたもののだが、権現とはいってもどんな神仏の権現なのか不明であり、語りのなかで伝承されてきた事柄ではないかとのことであった。これについては後考に俟ちたいと思う。

- (26) 遠藤利和「弥三郎婆さをめぐって」『町史編さん誌 むいかまち』1号、2004年、p.30.
- (27) 『通史』p.766; 『民俗』p.100.
- (28) 『通史』p.215.
- (29) 鈴木昭英、前掲書、p.60.
- (30) 柳田國男『先祖の話』筑摩書房、1946年（『柳田國男全集』15巻、筑摩書房、1998年、p.130）；同『山宮考』小山書店、1947年（『柳田國男全集』16巻、1999年、p.158）

【図版】

筆者撮影

【謝辞】

今回の調査では旧山古志村の村長をなさっていた酒井省吾氏から貴重なご教示をいただくことができた。小松倉の小川博二氏は邸宅内にある八海山大神の碑の撮影をご許可くださった。現地調査にあたって今回も長岡市役所山古志支所地域振興課長の齋藤隆氏よりご高配をいただいた。記して感謝申し上げます。